

## 中世歌謡における漢文学受容の一側面 — 『閑吟集』 から狂言へ —

謝 林

### The acceptance of classical Chinese literature in Japanese medieval songs: From Kanginshū to kyōgen

XIE, Lin

#### Abstract

The medieval *Kanginshū* collection of kouta songbook has a great number of works that were influenced by classical Chinese literature. This thesis focuses on the 26<sup>th</sup> song and in particular the word 上林 *shaurin* in the song and how classical Chinese literature has influenced medieval songs in order to highlight the influence of the song on kyōgen.

First of all, there are two readings of 上林, *shaurin* and *uenohayashi*, and I will estimate which one is used by considering the number of syllables, comparing the copy of the songbook that exists today with the original. I think the 26<sup>th</sup> song is superb and full of artistic technique from the perspective of its content and interest.

Next, researching different kinds of medieval literature, I look at whether scholars at the time had learnt the word, *shaurin*. My findings show that not only did they know the word, but they could also use it to write poetry expertly.

Finally, *Naruko* in kyōgen also has a song which is similar to the 26<sup>th</sup> song in *Kanginshū*. Starting with the *Tenshō Kyōgenbon*, I compared the words of this song with others that appear in all kinds of kyōgen from the middle ages until the present day. Obviously, they were found to have been changed for different purposes. The 26<sup>th</sup> song was not written to have a direct bearing on the everyday lives of the lower classes. Instead, it uses classical Chinese literature and culture in the form of kouta to express the fusion of Japanese and Chinese culture.

**Keywords** : Kanginshū, shaurin, classical Chinese literature, kyōgen, song

#### 要旨

中世の小歌を集めた歌謡集である『閑吟集』には、漢文学の影響を受けた作品が多く見られる。小論では、『閑吟集』二六番の歌を中心に、一首に含まれた「上林」という語をめぐって、中世歌謡における漢文学受容の一側面を句の単位から語の単位へと焦点を絞って考察し、さらに狂言への影響の一端について明らかにすることを試みるものである。

まず、現存する『閑吟集』の主要な伝写本について本文を比較し、「上林」に「しやうりん」「うへのはやし」という二種類の傍訓があることから、音数の視点から、同語の読み方の可能性を考察した。そして、歌の内容や趣向を検討することで、二六番の歌は技巧的に作成されたものであることを明らかにした。

次に、中世の各文献に出現した「上林」を調査し、中世の知識階層が「上林」という言葉を認識

していたかについて考察した。各文献における「上林」を精査することによって、中世の知識階層は「上林」という言葉を単に知っているだけでなく、詩文創作などにおいて同語の応用例も多数存在していることが明らかになった。

最後に、狂言「鳴子」には『閑吟集』二六番と類似する歌謡が存在する。その歌詞を天正狂言本をはじめ、中世から近世にかけての主要な諸台本と比較した。その結果、狂言諸台本の歌謡は、二六番に相当する歌謡の歌詞を目的に応じて変化させて取り入れたものである可能性が高いことが分かった。以上の考察から、『閑吟集』二六番の歌は庶民の実生活と直結する歌ではなく、漢文学或いは漢文化を巧みに生かして小歌の形で表現した和漢折衷と考えるのが妥当との結論に至った。

キーワード：閑吟集, 上林, 漢文学, 狂言, 歌謡

## —

『閑吟集』は、永正一五年(1518)に成立した中世歌謡集である<sup>1</sup>。その真名序の冒頭には「夫謳歌之為道、自乾坤定剛柔成以降、聖君之至徳、賢王之要道也<sup>2</sup>とあり、音律と徳政の関係を重視する儒教思想が前面に出ている。続く仮名序においても「是を吟じ移り行うち、浮世のことわざに触るゝ心のよこしまなければ、毛詩三百余篇になずらへ、数を同じくして閑吟集と銘す<sup>3</sup>とあり、中国の『詩経』<sup>4</sup>の収載歌数を基準にし、「閑吟」という漢風の漂う題名を定めるに至った経緯が述べられている。『閑吟集』の編者については、現段階ではまだ明確にされていないが、如何にも漢文学の素養豊かな人の手によって完成された選集だと思われる。『閑吟集』の歌と漢文学の関係を明らかにすることは、未だ明らかとなっていない編者の推定はもとより、『閑吟集』という作品自体の性格や後世の類歌への影響の解明などに様々な意義を持つと考えている。

中世は、いわゆる小歌の時代である。その時代の代表的な小歌集と目されている『閑吟集』に収載された三十一首の歌には、純粋な小歌の他に、大和節、近江節、田楽節、狂言小歌、放下歌、早歌、吟詩句など様々な形式の歌が広義の小歌として収録されている<sup>5</sup>。その中で、漢詩の形と全く一致する「吟詩句」は七首あり、それらの歌は間違いなく漢文学から影響を受けたとすることができる。例えば、二〇九番の「鶏声茅店月 人迹板橋霜」は漢詩の原型をそのまま借用したと考えられる。一方、小歌と思われる歌の中にも、漢文学から直接または間接に影響を受けた歌も少なくない。一〇二番の「今夜しも鄜州の月 閨中たゞ一人見るらん」、五一番の「何ともなやなう 人生七十古来稀なり」はその例となる。

『閑吟集』と漢文学の関係については、これまで多くの研究が行われてきた。志田義秀氏は「閑吟集に見える二句及び一句の詩句は、小歌化して居たものと推せられる<sup>6</sup>と指摘し、初めて漢詩の小歌化について言及した。また、浅野健二氏は「漢詩句を抱合して一首を形成したも

1 真名序の末尾に「于時、永正戊寅秋八月、青灯夜雨之窓、述而作、以貽同志云爾」とある。

2 小林芳則他校注『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』(新日本古典文学大系56) 岩波書店 平成五年 一八五頁。

3 同上 一九一頁。

4 中国最古の詩集。収載歌数は三十一篇(うち六篇は篇名のみ現存)。「毛詩」「詩三百」ともいう。

5 『閑吟集』の歌には「小」「大」「近」「田」「狂」「放」「早」「吟」の肩書きが付記されている。

6 志田義秀著「室町時代の小歌と閑吟集」『国語と国文学』 大正一三年六月号 九三頁。

のなどがあることは、当時盛行した和漢聯句の影響にもよるのであろうが、一つには吟詩句の律調が本来、小歌的であったため、容易に小歌化し得たものと思われる<sup>7</sup>と指摘した。さらに、吾郷寅之進氏は「閑吟集の編者が禅林に属する者であるということはほとんど疑いえないと思われるが、そのみではなく、集中の歌謡にも、禅林文学の詩文（特殊な場合には経典）から出たことの明らかなものあるいは、その可能性の大なるものがかなりの数にのぼる<sup>8</sup>と考察し、漢詩と関係をもつ歌を「原詩乃至原典そのままの形のもの」「一部分原典そのまま、一部分和風化されたもの」「全体として純小歌化されたもの<sup>9</sup>の三つに分類した。

しかし、吾郷氏が漢詩との関わりがあるとした歌には、原詩乃至原典が特定できていない歌が多く存在する。そして、小歌と見られる歌の中にも、例えば「柳絮」「上林」「風波」「残月清風」「咫尺」「言語神変」「紅羅」のような語が使用されており、何れも高度な漢文学素養を持たないと理解し難い表現である。漢文学が閑吟集に与えた影響を全面的に考査するならば、文献に基づいて個別具体的に実証しなければならないのではないか。

句の単位から語の単位へと焦点を絞り、漢文学から取られた濃厚に漢文学的色彩を帯びる詩語<sup>10</sup>が含まれる歌を考察することができれば、『閑吟集』に収載された歌と漢文学の相互関係を一層明確にすることが可能になると思われる。

小論は、『閑吟集』二六番の歌に含まれる「上林」という語を中心に、これまで漢文学との影響関係という視点から研究されていなかった『閑吟集』二六番の歌を見直そうと試みるものである。『閑吟集』における漢文学受容の一側面について、五山文学や狂言などの周辺文学と結び付けながら考察し、さらに狂言への影響について論を進めていく。

## 二

まず、『閑吟集』二六番の歌の本文を示しておこう。

上林に鳥が棲むやらう 花が散り候 いざさらば 鳴子を掛けて 花の鳥追はう

一首の冒頭に、「上林」<sup>11</sup>という特別な表現が使用されている。この歌を解説するには「上林」の読み方を最初に明らかにしなければならない。「上林」の読み方を分析する前に、『閑吟集』の伝写本について説明しておきたい。『閑吟集』の原本は世に残らず、現在に伝わってきた伝写本は、「宮内庁書陵部蔵図書寮本」（略称、図本）<sup>12</sup>、「志田延義博士蔵本（阿波国文庫旧蔵）」（略称、阿本）<sup>13</sup>、「水戸彰考館蔵本」（略称、彰本）、「静嘉堂文庫蔵本」（略称、静本）の四種が存

7 浅野健二著『閑吟集研究大成』明治書院 昭和四三年 八一―八頁。

8 吾郷寅之進著『中世歌謡の研究』風間書房 昭和四六年 三〇―九頁。

9 同上。

10 漢詩の中に多用された語。高度な漢学素養を持たないと理解し難い語。

11 日葡辞書には収録されていない語である。

12 中哲裕氏は著書『閑吟集定本の基礎的研究』の中で「書本」「書陵部本」という呼称を使用しているが、小論では多くの先行研究で使用されてきた「図本」という略称を使用した。

13 阿波国文庫旧『閑吟集』は現在志田延義氏が所蔵されているため、『閑吟集定本の基礎的研究』では「志本」「志田本」と呼称している。小論では前掲12の理由により「阿本」という略称を使用した。

するが、これらはいずれも『閑吟集』原本の成立した永正一五年（1518）から一〇年後の大永八年（1528）四月中旬書写の奥書を有する本を写した本からの転写本である。これらの伝本のうち、静本について、浅野氏は「明治十二年八月の新写で、前三本に存するところの真名序および歌謡の種別を示す肩の朱書を欠き、校異には用い難いものである」<sup>14</sup>と述べておられるので、小論では、静本については考察の対象から外すことにする。

中哲裕氏の著書『閑吟集定本の基礎的研究』<sup>15</sup>には阿本の影印とともに阿・図・彰三本の校異が収められているので、二六番の歌における伝写本の差を知ることができる。同書に基づき「上林」の部分の校異を示せば、以下の通りである。

阿本…上林（右訓：しやうりん 左訓：うへのはやし）  
 図本…上林（右訓：しやうりん 左訓：うへのはやし）  
 彰本…上林（右訓：しやうりん）

『閑吟集』において左右に二つの訓をつけることは非常に珍しいことであり、「上林」以外では筆者の調べた限りでは五〇番の歌「何ともなやなふ 〵 うき世は風波の一葉よ」の「風波」と「葉」の二箇所しかなかった。それぞれの校異を示せば、以下の通りである<sup>16</sup>。

阿本…風波（右訓：なみ 左訓：ふうは） 葉（右訓：は 左訓：よう）  
 図本…風波（右訓：なみ 左訓：ふうは） 葉（右訓：は 左訓：よう）  
 彰本…風波（右訓：なみ 左訓：ふうは） 葉（右訓：は）

これらの訓は誰が付けたのか、なぜ二つの読み方を付けなければならなかったのかといった疑問が浮かんでくる。浅野氏によると、漢字に施された振り仮名は、編者の行為とは考え難いというのが<sup>17</sup>、その考え方に従う場合、少なくとも読み仮名を付した書写者は、「上林」「風波」「一葉」をどのように読むのかについて迷っていたということが言えるのではないかと。

縦書きの文献における一般的な筆記法から考えると、右訓が先に記され、左訓はその後に付されたと考えるのが自然である。すなわち書写者にとっては、「上林」は「しやうりん」が、「風波」は「なみ」が、「葉」は「は」が、それぞれの漢字における読み仮名の第一候補であったということになる。このうち、「しやうりん」は音読み、「なみ」「は」は訓読みなので、機械的な基準<sup>18</sup>に基づいて付したものととは考え難い。注意すべきは、彰本の読み仮名である。『閑吟集』諸本の本文を精査した中哲裕氏によると、彰本と図本は系統的に近い本文を持つが、彰本の底本は書写の過程で一部の訓を削るという改変を施した本であったという<sup>19</sup>。図本では「上

14 前掲7 七八八頁。

15 中哲裕著『閑吟集定本の基礎的研究』（新典社研究叢書112）新典社 平成九年 一九六頁。

16 同上 二〇一頁。

17 前掲7 七八九頁。

18 ここは読み仮名を付した者が単純に「右訓左音」のような基準を立てて機械的に作業をしたのではなく、内容を吟味した上で読み仮名を付しただろうという意味である。

19 前掲15 二九六～三〇〇頁。

林」と「葉」に二つずつ付されていた振り仮名が彰本では「しやうりん」と「は」だけになっているので、少なくとも彰本の底本の書写者はそれぞれの漢字をこう読むべきだと考えていたとは言えるだろう。もちろん、それはあくまでも書写者の判断であって『閑吟集』の編者のものではない。はたして編者自身は、読者がどのように読むことを期待して本文を「上林」と表記したのだろうか。

まず音読みの「しやうりん」<sup>20</sup>で読んだ場合を考えてみよう。『大漢和辞典』で「上林」という漢語を調べればわかるように、「上林」には「天子の苑の名」<sup>21</sup>という意味がある。これは「上林苑」とも言い、漢代の宮殿、苑囿、陵墓などの来歴を紹介した『三輔黄図』<sup>22</sup>によれば、秦の旧苑を土台として漢代に建築された天子の庭園のことである。さらに、『西京雜記』<sup>23</sup>には「初修上林苑、羣臣遠方各獻名果異樹」<sup>24</sup>とあり、漢の上林苑が修築された際に、百官や地方の人が珍奇の植物を献上した話が記載されている。「やらう」は不確定や推測を表す語なので、「しやうりん」と音で読む場合、最初の部分は、天子の御苑には鳥が暮らしているだろうという推測の意になる。

これに対し、「上林」を訓読みの「うへのはやし」で読むと、「うへ」は方向を表す語であるから、単純に「上の方向にある林」「上手の林」の意味となる。この場合は、上手の林に鳥が暮らしているだろうということになる。もっとも、「うへ」という語は「国王や公方などのような、最上の君主」<sup>25</sup>の意味としても使われることがあるので、「うへのはやし」を「天皇の林」と解釈することも一応は可能である。とは言え、そのように解釈するためには、二六番の歌の中に天皇の存在を匂わせるような要素がもっと必要であるように思われる。たとえば「うへの御はやし」<sup>26</sup>のように尊敬の意の接頭語が付いているとか、明らかにこれは宮中の話なのだと読み手が判断可能な事柄が登場するとかでもない、さすがにそのように解釈するわけにはいくまい。漢語の「上林」とその意味を知っている人であれば、或いはそこからの連想でそのような解釈をしてくれる可能性も多少はあるかもしれないが、それはあまりにも読み手の読解力に頼り過ぎていると言うべきだろう。

以上、「上林」の読み方によって歌意が大幅に変わることを確認したが、どちらの場合でも

20 「上林」を音読みする場合、清濁いずれで読むべきかが問題となるが、キリシタン資料に用例が見えないため、非常に判断が難しい。幸い『平家物語』巻二・蘇武に「上林苑」の用例があるので、いくつかの平家正節諸本で当該箇所を確認したが、濁点の付された例はなかった。平曲はその性格上発音の違いに敏感な資料のほうなので、そこに濁点が付いていなかったということは、消極的ではあるが清音で読まれていたことを示唆するものである。一方、他の資料で濁点を付した用例は見出すことができなかった。だからと言って、濁音形が存在しなかったと断定することができない。小論ではとりあえず伝写本表記の「しやうりん」で統一したが、これは「じやうりん」と濁音で読む可能性を排除するものではないことに留意されたい。

21 諸橋轍次著『大漢和辞典 巻一』大修館書店 昭和三〇年 二一七頁。

22 六卷。撰者未詳。宋の晁公武は、梁陳の間の人の作といひ、程大昌は、唐の肅宗以降の作といふ。此の書は、主として長安の古蹟を記して居る（『大漢和辞典 巻一』一八二頁）。早稲田大学の古典籍総合データベースの所蔵資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

23 六卷。舊本、晋、葛洪撰と題す。或は漢の劉歆の撰といひ、又、梁の呉均の依託ともいふ。西漢の雜事を録したもの（『大漢和辞典 巻一〇』二八七頁）。

24 早稲田大学の古典籍総合データベースの所蔵資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

25 土井忠生他編『邦訳 日葡辞書』岩波書店 昭和五五年 七三九頁。

26 『時代別国語大辞典 室町時代編一』に引かれる「上ノ御聖化御恩」「うへの御馬」の例が参考となる。

歌謡としては一応成立するように見える。本論冒頭の紹介のように、『閑吟集』の編者は高度な漢文学の素養を持つ知識階層であるが、だからと言ってそのことだけを根拠として「上林」は音読みされた可能性の方が高いというのはさすがに短絡的に過ぎるので、次は音数と一首の趣向から検討してみたい。

「上林に」を「うへのはやしに」で読む場合は、七拍である。それに対し、「しやうりんに」には特殊拍である長音や撥音が含まれるため、『閑吟集』当時にこれらの特殊拍を一拍として数えていたかどうかは問題となるが、とりあえず現代日本語のように特殊拍を一拍分として数えれば五拍となる<sup>27</sup>。その次の句である「とりがすむやらう・はながちりそろ・いざさらば・なるこをかけて・はなのとりおはう」と一緒に考えてみると、「うへのはやしに」であれば「七・八・七・五・七・八」、 「しやうりんに」であれば「五・八・七・五・七・八」となる。二六番が三句目と四句目のところで前後に分かれる歌であると考えれば、後者が「五・八・七／五・七・八」と旋頭歌に近い形式になるので、前者よりも韻律として整った形になっているとは言えそうである。もっとも、小歌を集めた『閑吟集』の歌を見る限り、必ずしも七五調や五七調といった一定の韻律がないようである。浅野氏の『閑吟集研究大成』では「詩形に一定した中心形式が存在せず、今様よりもっと自由な、新しい句型を示している」<sup>28</sup>と述べている。こうしてみると、音の視点からどちらの読み方が勝るかどうかを判断することは困難であるように思われる。

それでは、一首の趣向としてはどうだろう。「上林」の意味が「天子の御苑」にせよ、「上の方向にある林」にせよ、そこに鳥が存在することを推測する根拠となっているのは、今花が散っているという事実のみであることには変わりない。「花が散っています。さあ、鳴子を仕掛けて花を散らす鳥を追い払おう」という提案をしているが、本当に目の前に鳥がいるかどうか実は不明である。前述したように、鳥の存在は推測に基づくものなので、花を散らす存在は必ずしも鳥であるとは限らない。花はむしろ風で散るのが一般的である。『閑吟集』でこの歌の直後に配置されている二七番と二八番の歌を見てみよう。

地主の桜は 散るか散らぬか 見たか水汲み 散るやら散らぬやら 嵐こそ知れ  
(『閑吟集』二七番)

神ぞ知るらん春日野の 奈良の都に年を経て 盛りふけゆく八重桜 散れば  
ぞ誘ふ誘へばぞ 散るはほどなく露の身の 風を待つ間のほどばかり 憂きこと繁  
くなくも哉  
(『閑吟集』二八番)

二首は何れも風に散る花を詠んでいる。花が散る原因は風なのに、わざわざ「鳥」を登場させ、

27 たとえば『閑吟集』の四〇番や一六一番（後半部分）のように全体として七五調となっている歌において、七が期待される「かのせうくん（昭君）の」「女郎とかける」「誰かいらう（偕老）を」「かの邯鄲の」がいずれも長音及び撥音を一拍分として数えないことには七にならないことも判断の材料としている。

28 前掲7 八二四頁。

鳥のせいに行っているところが二六番の趣向なのである。

また、鳥を追い払うために、「鳴子」という道具を歌中に導入しているところも重要である。そもそも鳴子<sup>29</sup>は収穫前の稲を害鳥から護るために使用される極めて実用的な道具である。しかし、二六番の歌の「鳴子」は、ここでは花を散らさないための道具という農業活動と全く関係ない物として使用されている。『閑吟集』の配置<sup>30</sup>から見ても花が散るという内容から見ても、二六番の歌は明らかに春の季節の歌なのに、秋の風物詩となる鳴子を取り上げることは普通に考えにくいことではないだろうか。ちなみに、「鳴子」を詠み込む和歌<sup>31</sup>を調べてみると、「みたやもりなるこのつなに手かくなり晴間もみえぬ霧のみなかに」（堀河百首）、「吹くをりはなるこのおともたえせねば風のもりけるやまだなりけり」（六百番歌合）、「なるこひくしづが門田のむら雀たちみに物を思ふころかな」（拾玉集）など、「風」「霧」「山田」「雀」などの情景を描くものが多かった。それに対し、「花」など春の事物と組み合わせる歌はなかった。「鳴子」を「花」と組み合わせた『閑吟集』二六番の歌は、伝統的な和歌と異なる新しさが見えるのではないか。

種々の不可解なところを持つこの二六番の歌であるが、そもそも『閑吟集』に収められたこの歌は下層の民衆が享受するものではなく、風雅の上層生活に憧れる知識階層の手によって作られた歌のはずである。二七番の歌も「地主の桜」<sup>32</sup>という特定の土地に咲く桜が題材として取り上げられているし、二六番の歌も、どこにでもあるような「上の方向にある林」ではなく、漢籍と深い関係をもつ「上林苑」のことを歌っていると考えた方がよいように思われる。先述したように、『閑吟集』の編者は不明である。具体的な人物までは特定できないが、仮名序に書かれた「こゝに一人の桑門あり」「僧侶佳句を吟ずる廊下の声」などの記述に従えば、編者が僧形の人物であることは間違いのないところだろう。<sup>33</sup>僧侶をはじめ、中世の知識人たちにとって「上林」という漢語はどの程度一般的だったろうか。『閑吟集』の編者が「上林」という語を「天子の御苑」の意味として正しく理解し歌に使用する可能性はあるのだろうか。また、一首にとって「上林」という語はどんな役割を担っているのだろうか。以上の疑問を持ちながら、次節で中世の各文献に出現した「上林」を見てみよう。

### 三

『雑字類書』<sup>34</sup>には、「上林」という漢語について特に項目を立てて説明するということがなされていないが、「上林」自体は屢々使用されている。同資料の「李」「梨」の項目を見ると、以下のように記されている<sup>35</sup>。

29 中世の『一遍聖繪』には、鳥から収穫前の稲を護る鳴子の様子が描かれている。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

30 和歌集の部立のように、春、夏、秋、冬、雑の配列方法が見られる。

31 「なるこ」を検索対象に、新編国歌大観のデータベースを利用して調査を行った。

32 清水寺の地主権現の桜。

33 かつて連歌師宗長編者説があったが、現在ではほぼ否定されている。序文の記述に従って解説すれば、僧形の人物を想像することは容易である。

34 室町時代の国語辞書。書中に「文明六年」（1474）とあることから「文明本節用集」とも称される。国立国会図書館デジタルコレクションの資料を利用した。

35 詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

李 西京雜記曰上林苑有紫李青桃綺李（略）

梨 西京雜記上林苑有紫梨大谷梨縹梨（略）

（『雜字類書』）

ここでは、前節で述べた『西京雜記』の上林苑に関する記述を引用し、李と梨について解説している。漢の上林苑を修築する時、百官や各地の人が珍しい植物を献上したが、その中に、各種の李と梨が入っていたのである。

また、「主水司」の項目において、相当する中国の官職について説明しているが、ここにも「上林」が登場する。

主水司 唐名上林署云云不愜 或云膳部署又不愜 正一人相當従六位上 唐名上林  
令云 同上佑相當正八位下（略）

（『雜字類書』）

主水司は、宮中の飲料水又は氷などを管理する官職である。中国では上林苑を管理する人は、その「主水司」の仕事を担当することが多い<sup>36</sup>。『唐官鈔』には、上林署という部門について以下のように記載されている<sup>37</sup>。

六典云 掌苑囿 園池之事 ○漢ノ時ニ上林苑アリ 故ニ令丞アリ 後世コノ例ニ  
因テコノ名アリ

（『唐官鈔』 卷之中）

漢代以降、歴代の王朝も「上林」という言い方を継承した。従って、「上林署」や「上林令」の「上林」は、「上林苑」の省略形として理解することができる。

さらに、「内裡」という項目を見てみると、以下のように記されている。

内裡 又作大裡 異名九重 九禁 紫禁 禁園 禁門 禁中 禁宮 禁掖 禁闕  
金門 金屋 鳳闕 鳳凰城 鳳宮 紫宸 紫微宮 五雲天 上林 蓬萊宮 長生殿  
魏闕 龍闕（略）

（『雜字類書』）

「内裡」は、天皇の住居を中心とする御殿を指す。広い意味で「宮中」「御所」「皇居」のことを表す語であると言える。「上林」を含め、この項目の下に「内裡」の類義語が数多く挙げられている。漢詩文においてそれらの語は「天子の宮殿」として多用されている。

36 兪鹿年編『中國官制大辭典』黒龍江人民出版社 平成四年 五三～五四頁。

37 唐の三省六部の概要をまとめた書物。作者は江戸中期の伊藤長胤。早稲田大学古典籍総合データベースの資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。



る<sup>38</sup>。

このように、「上林」が常用語として立項されていないにもかかわらず、解説用語として広く使用されていることからわかるように、当時の知識階層にとって、既にこの言葉は教養レベルの理解語彙として普通に認識されていたと判断してもよさそうである。

また、『天隱和尚四六図』には、以下のような禪林四六文の作法が記録されている<sup>39</sup>。

虎関和尚四六法

… (中略) …

疎隔句

秋月明 南楼雲晴之暁

春花綻 上林風扇之時

… (中略) …

密隔句 上五六七八九字 下三字

菓則上林苑之所献 含自消

酒則下若村之所傳 傾甚美

(『天隱和尚四六図])

天隱和尚は、天隱龍沢のことである。また、虎関和尚は、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて活躍した虎関師鍊のことを指す。漢詩文の教科書乃至入門書に準ずる四六図の中で、天隱龍沢は虎関和尚の四六文の作法を引用しているわけであるが、その例文の中で「上林」「上林苑」が使用されていることから、これらの漢語が当時の知識階層にとって基本的な素養であったことを窺うことができよう。

その他、抄物の世界でも「上林」は多く言及されている。

たとえば、『詩学大成抄』には「上林ハ大裡ノ下」という説明が見える<sup>40</sup>。前述した『雑字類書』の「内裡」の項目に「又作大裡」とあることと一致しており、「上林」が「宮殿」の意味として理解されていることがわかる。

また、『史記抄』<sup>41</sup>には「乃當作朝宮渭南上林苑中先作一」（『秦始皇本紀第六』）、「文選ニハ上林賦トテ別ニ載タソ（中略）無是公听然而笑ト云カラ上林賦ソ終始一霸王モ滻水モ始メカラ終マテ上林ノ中ニアルト云心ソ」（『司馬相如第五十七』）などがあり、「上林苑」又は「上林賦」のことを屢々記載している。

38 九重＝「九重春色暁依々 御柳和風露未晞」（『翰林葫蘆集』）、禁園＝「玉管吐陽気 春色啓禁園」（『懷風藻』）、九重、鳳闕＝「三會龍華開寶樹 九重鳳闕祝皇天」（『空華集』）、紫宸＝「上承紫宸長拱宿 下送蒼海永朝潮」（『文華秀麗集』）、上林＝「不期逐恩詔 從駕上林春」（『懷風藻』）、龍闕＝「鳳池後面新秋月 龍闕前頭薄暮山」（『和漢朗詠集』）。

39 四六文を教える書物。天隱竜沢著。国立国会図書館デジタルコレクションの資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

40 市立米沢図書館デジタルライブラリーの公開資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

41 室町中期の『史記』の注釈書。桃源瑞仙著。京都大学貴重資料デジタルアーカイブの資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

上記の抄物はいずれも五山僧が関わったものであるが、五山僧系の抄物としては『四河入海』も外せない。同書は笑雲清三によって編纂された蘇軾の詩の注釈書であり、瑞溪周鳳、大岳周崇、一韓智翹、萬里集九の四人の説をまとめて自らの説を加えたものである。彼らはいずれも『閑吟集』の成立する永正一五年以前に活躍していた五山僧であるが、その中に収録されている蘇軾の歌を見ると、「春草池塘連速夢 上林鴻雁子卿歸」「上林桃花開 水暖鴻北翥」など「上林」という表現が使われる用例がある。そして、それらの漢詩の注釈を見ると、「春草池塘連速夢 上林鴻雁子卿歸」の下に下記の注釈がある<sup>42</sup>。

上林 脞云、時ニ坡北歸、故云爾、

上林一 白云、以蘇武、先生自比也、其ノ氏同故也、

(中略)

一云、(中略)上一(中略)漢書武帝ノ、上林テ射雁ヲ、アレハ、雁足ニ、蘇武カ、

書カ、有タト、云ニ、鴻ノ字ハ、某ニハ、ナイニ、坡カ、鴻ノ字ヲ、添テ、上林鴻雁ト云  
ソ、(以下略)

また、「上林桃花開 水暖鴻北翥」の隣に付した注釈もある<sup>43</sup>。

上林 芳云、漢旧儀一苑廣長三百里、離宮七十所、

(中略)

芳云、(中略)上林、漢之帝苑也、既理北一而歸、則正逢上林花開矣、

上林 白云、願君以下、祝正輔也、上林之桃花コソ、カツ、コフ、ナレ、

一云(中略)上林一言ハ正輔召シ還(カサレ)、京へ、歸ル時分ハ、上林苑ノ、桃花開テ、  
水一ハン時分テ、アルヘキソ、(以下略)

「脞」「白」「芳」「一」は、それぞれ蘇軾の作品についての注釈書である。「脞」は瑞溪周鳳の『脞説』。「白」は萬里集九の『天下白』。「芳」は大岳周崇の『翰苑遺芳』。「一」は一韓智翹の『一韓聽書』を指す。彼ら四人の五山僧が蘇軾の詩の中に使用される「上林」という語に対して「漢之帝苑」「上林苑」としている。

このように見てゆくと、「上林」又は「上林苑」という漢語は当時の知識人であれば普通に知っていてもおかしくない言葉であったことがわかる。それどころか、漢文学の素養を持つ五山僧たちは、「上林」という漢語を使用して実際に詩文を創作さえしていたのである。以下にその用例を示す。

春入上林鶯欲歌 曉雲光裡日初知 宮中多暇宸遊早 喚取小車花底過

(『心田詩藁』<sup>44</sup>)

42 国立国会図書館デジタルコレクションの資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい(四河入海六之三 三十九)。

43 詳細は文末の添付 URL を参照されたい(四河入海十四之四 十九)。

44 心田清播著。塙保己一編『続群書類従 第12輯ノ上 文筆部』明治三八年 四一二頁。

春樹深園花氣薰 黃鸝鳴斷欲斜曛 舊巢記否礪邊草 聲入上林紅杏雲  
(『松蔭吟稿』<sup>45</sup>)

金衣暎刷綠楊陰 一曲綿蛮入上林 幽谷土風猶未忘 桃花深處操南音  
(『翰林五鳳集』<sup>46</sup>)

我年終十伴翁遊 見尽關東七八州 今日上林花与柳 雖如相識以応羞  
(『梅花無尽蔵』<sup>47</sup>)

萬里鯨波欲問津 身生和國姓明人 上林到日應花咲 送以田中禽語新  
(『翰林葫蘆集』<sup>48</sup>)

驪裏春嘶沙苑草 綿蛮朝囀上林花 法幢若到龜山下 応有神竜護木叉  
(『蕉堅稿』<sup>49</sup>)

以上の詩文を見ればわかるように、「上林」は「花」「鳥」「春」などの言葉と取り合わせて作詩されている。字数や押韻の関係で、「鳥」が「鶯」「綿蛮」「金衣」「黄鸝」<sup>50</sup>などの言葉に替えられている場合もあるが、当時の知識人が意識してそれらの言葉を使っていたことは間違いなさそうである。また、「上林」だけではなく、「上苑」を使用した詩もある。以下の例などは、詩題では「上林」を使用していながら詩本文で「上苑」という語を使用している。

「上林残雪」

上苑未看春色生 金階雪照御簾明 何人諫獵奏書罷 日暮初帰玉佩聲  
(『眞愚稿』<sup>51</sup>)

「上林春雪」

上苑雪従年後奇 天公呈瑞在丹墀 吾王春獵獲非獸 先向山陰召戴達  
(『三益稿』<sup>52</sup>)

45 琴叔景趣著。塙保己一編『続群書類従 第13輯ノ上 文筆部』明治四〇年 五七二頁。

46 以心崇伝編。国立国会図書館デジタルコレクションの資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

47 万里集九著。国立国会図書館デジタルコレクションの資料を利用した。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

48 景徐周麟著。上村観光編『五山文学全集 卷四』思文閣 昭和四八年 二八〇頁。

49 絶海中津著。上村観光編『五山文学全集 卷二』思文閣 昭和四八年 一九一八頁。

50 漢詩文には「綿蛮」「金衣」「黄鸝」は「鶯」の意を表すことが多い。

51 西胤俊承著。上村観光編『五山文学全集 卷三』思文閣 昭和四八年 二七一四頁。

52 三益永因著。塙保己一編『続群書類従 第13輯ノ上 文筆部』明治四〇年 四九二頁。

「上苑」は『和漢朗詠集』でも「花明上苑，輕軒馳九陌之塵，猿叫空山，斜月瑩千巖之路」<sup>53</sup>のように使用されているが、『和漢朗詠集註』<sup>54</sup>はこの詩文に対し「上苑とは上林苑也」<sup>55</sup>と注しており、「上林」「上苑」共に「上林苑」のことを指していることがわかる。

また、『幻雲詩藁』<sup>56</sup>には、以下の詩がある。

「招伊陽雪谷侍史 今春義材相公初参内」

上苑春深花已飄 佳人留滞以詩招 天涯若問洛陽事 緑髮將軍初入朝

(『幻雲詩藁』)

「上林」の同義語である「上苑」が使用されているが、詩題に付記された「今春義材相公初参内」の文中に見える「義材」とは、室町幕府第一〇代將軍足利義植の初名である。すなわちこの詩で描写されているのは中国ではなく日本であり、詩中の「上苑」も天皇の宮殿のことを指していることが明らかである。「上林苑」は本来の意味を超えて日本の「天皇の宮殿」を意味する言葉として使用されるにまで至ったのである。

以上、「上林」及び同義の「上苑」という語が使用されている中世の日本漢詩文を検討してきたが、中世の知識人はこの語を知っていただけではなく、詩語として上手く使用することができたことがわかった。

ここで、再び『閑吟集』の二六番の歌に戻ると、「上林」の他に「鳥」「花」という言葉が出てくるほか、編集上、春の部門に置かれている。これは、五山僧の作った漢詩文の構造と一致している。となると、「上林」も漢詩文のように「天子の御苑」を意味する漢語として理解し、「しやうりん」と音読みするのが漢詩文の影響を受けた小歌としてふさわしいのではないかと思われる。

最後に、前節で述べた「鳴子」の趣向について、なぜこの歌で実用性をもつ農具である鳴子を非実用的な物として登場させたのかについて検討してみたい。

盛唐の栄華を物語る『開元天宝遺事』に「花之金鈴」を題目にした文章がある。本文には「天宝初，寧王日侍，好聲樂，風流蘊藉，諸王弗如也。至春時，於后園中結紅絲為繩，密綴金鈴，擊於花梢之上，每有鳥鵲翔集，則令園吏製鈴索以驚之，蓋惜花之故也。諸宮皆効之」<sup>57</sup>とあり、唐の天宝（742-756）の初めの頃，寧王<sup>58</sup>（玄宗皇帝の兄）が自身の宮中の花を散らさないように鳥を追い払う鈴，いわゆる「護花鈴」を設置したというエピソードが記されている。

池田廣司氏は二六番後半の「鳴子」について、中国の「護花鈴」のパロディとして「鳴子」

53 高野辰之編『日本歌謡集成 卷三 中古編』東京堂出版 昭和三五年 一六頁。

54 『和漢朗詠集』の注釈書。詩文の注はいち早く永済によって完成したが、和歌の部は後に北村季吟が補足した。

55 前掲53 一三一頁。

56 月舟寿桂著。塙保己一編『続群書類従 第13輯ノ上 文筆部』明治四〇年 一八四頁。

57 五代の王仁裕著。京都大学貴重資料アーカイブの資料を利用した。舟橋師賢による写本である。詳細は文末の添付 URL を参照されたい。

58 姓諱は李憲。唐の睿宗（第五・第八代皇帝）の皇太子であったが、祖母であった武則天の皇位篡奪により皇太子の地位を失い、父睿宗の復位後も皇太子となる権利を放棄して弟（玄宗）に譲り、自身は一皇族として一生を終えた。諡は讓皇帝。

に置き換えたものであり、「それが人気を博して、室町時代の小歌として『閑吟集』にも採取され、数々の類歌を生むに至ったものと考えられる」<sup>59</sup>と述べておられる。さて、室町時代の僧侶たちは、果たしてこの「護花鈴」の存在を知っていただろうか。この疑問を持ちながら、『中華若木詩抄』を調べていたところ、以下のような記述を見出すことができた<sup>60</sup>。

花上金鈴 簫水厓  
 揺曳金鈴日幾回  
 不教紅紫委蒼苔  
 誰知鳥鵲驚飛去  
 別有脚花野鹿来

花上ノ金鈴ハ、唐明皇ノ時宮中ニセラレタコト也。紅ノ絲ヲ金鈴ニ付ケテ花上ニ掛ケテ鳥鵲ヲ驚ス也。一二ノ句、此鈴ヲ花ノ為ニ毎日幾度モ揺ガス也。コレハ紅紫ノ花ヲ鳥鵲ニ落サセジト也。蒼苔ハ、紅紫ノ字ニ映ジテ面白也。花ガ苔ノ上ヘ落ルト云義マデ也。三四ノ句、誰カ知ント云ハ、人ノ知ゴトナイト云心也。鳥鵲ハ此鈴ニ驚テ飛去テ、紅紫ニ近付カザルガ、又、野鹿ト云ヘル荒ケナキ者ガ来テ、玄宗ノ秘藏ノ花ヲ荒スゾ。ソレヲバ是鈴モ了簡ニ及バヌゾ。玄宗ハ鳥鵲ヲバ防ギタレドモ、又、野鹿ト云ヘル強者アリトハ知ラヌゾ。野鹿脚花トハ、玄宗ノ時民間ヨリ牡丹ヲ進上シタレバ、野鹿ガ来テ含ミ去ルゾ。コレ即安祿山ガ天下ヲ乱スベキ前表也。祿ハ鹿也、安ハ鞍也。唐ノ代ニ鹿ト云ヘバ、即安祿山ガ心ニ用ルゾ。コ、モ安祿山ヲ指シテ野鹿ト云ゾ。

(『中華若木詩抄』)

『開元天宝遺事』の「花之金鈴」と類似する「花上金鈴」という題名の漢詩とその注釈が記載されており、『開元天宝遺事』の記述とよく似たエピソードが記されているが、『開元天宝遺事』では寧王のこととされていた話が『中華若木詩抄』では弟の玄宗皇帝のエピソードになっている。とは言え、鳥を驚かす鈴の描写は「紅ノ絲ヲ金鈴ニ付ケテ花上ニ掛ケテ鳥鵲ヲ驚ス也」とあり、『開元天宝遺事』の記事と一致している。『中華若木詩抄』では具体的に「護花鈴」という道具の名称について言及されていなかったが、『雑字類書』を調べてみると、「鳴子」の下に「驚鳥物也」<sup>61</sup>という説明があり、「護花鈴」「鳴子」という二つの道具は共通性をもっているとは言えるのではないかと。

さらに、五山僧の漢詩を調査したところ、『翰林葫蘆集』に「護花鈴」という語を使用している漢詩を数首見つけることができた。

59 池田廣司著『狂言歌謡研究集成』風間書房 平成四年 二四九～二五〇頁。

60 大塚光信他校注『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』岩波書店 平成七年 一五三～一五四頁。

61 詳細は文末の添付 URL を参照されたい(『雑字類書』の項)。

「便面」

其田上々自秋成 宿鴈驚飛月照汀 稼穡艱難天去咫 春風唐殿護花鈴  
野曠山長絕四隣 深紅淺紫草花新 蕭々吹露無媒路 只有素娥來問人

「畫贊」

鈴索揺風護稻花 山前雁散數行斜 田田今夜宿何處 新月如弓影照沙

「護花鈴 會于萬松軒即席」

風鈴聲裏鳥相呼 自古護花如此無 好是君家松下聽 頻遭吹着日胡蘆

「護花鈴」

鳥聲春雨海棠開 從此君王醉幾回 落日風鈴語何事 報言花外綠兒來

「風吹殿鈴鈴鳴耶風鳴耶 僧伽難提」

殿鈴說法本無情 堪咲難提兩耳鳴 又被東風翻梵語 大唐國裏護花鈴

(『翰林胡蘆集』)

このうち、「春風唐殿護花鈴」「大唐國裏護花鈴」は、明らかに唐の護花鈴に関する逸話を踏まえた表現である。また、「畫贊」と題した一首は、「鈴索」が風で揺れることで「稻花」を護っていると詠じているが、承句に秋に飛来する「雁」が登場することから、この「稻花」は文字通り稲の花のことを言っているのではなく、稲穂の意味で使用されていると解される。音を立てることで稲穂を護る道具と言えば「鳴子」である。すなわちこの詩で歌われている「鈴索」は「鳴子」を「護花鈴」に見立てた表現ということになり、「護花鈴」の代用として「鳴子」を持ち出した『閑吟集』二六番の歌と同じ発想で作られた作品として位置づけられるのではないか。

さらに言えば、「護花鈴」自体が「花上金鈴」というエピソードから生まれたものなのであるから、その物語と密接に関わる場所として「内裡」「天子の御苑」の意の「上林」が二六番の歌に登場するのはそもそも必然のことでもあったのである。

以上、漢語「上林」の使用例を検討してきたが、僧侶をはじめ、中世の知識階層が「上林」という語を「天子の御苑」として認識していたことを明らかにすることができたのではないかと思う。「天子の御苑」たる「上林」を「花」「鳥」、また季節の「春」と組み合わせる漢詩を作る一種のパターン化された創作形式も存在していた。筆者が調べた限りでは、鳴子が日本の宮中で「護花鈴」の代わりに実際に使用されたことがあったかどうかはわからなかったが、仮に想像の産物であったとしても、漢文学の素養のある知識階層によって創作された二六番の歌の「上林」を「しやうりん」と音読する蓋然性は十分示すことができたのではないだろうか。

しかし、その「しやうりん」もそのままの形で定着することはなかった。次章では狂言歌謡を取り上げてその後の「上林」を追跡してみたい。

## 四

『閑吟集』の歌は、狂言と緊密な関係をもっている。現存最古の狂言資料である「天正狂言本」<sup>62</sup>（以下、天正本と称する）を見る限り、「わかな」「なるこ」「ちうや帰り」<sup>63</sup>「恋のおふち」<sup>64</sup>という四曲には、『閑吟集』と類似する歌謡が歌われている。そのほか、近世の狂言台本にも「金岡」「花盗人」「鞠猿」等に『閑吟集』と関係をもつ歌が存在する<sup>65</sup>。しかし、『閑吟集』には「狂」という肩書をもつ歌は、二首しか収録されていない。それ以外の歌は全部「小」と付けられており、編纂当時に巷で流行していた小歌から採ったものが多いと思われる。また、『閑吟集』と狂言との間で共有されているこれらの歌謡も、仔細に歌詞を比較すると、少なからぬ異同が存在している。これらの歌が同じ歌謡に由来するものであるならば、なぜ違いが生じたのか、この節では、上記の疑問を持ちながら、『閑吟集』と狂言の関係について考察してみよう。

先述したように、天正本には『閑吟集』と類似する歌謡が歌われているが、『閑吟集』二六番に相当する歌謡が歌われるのは「なるこ（鳴子）」という狂言である。「鳴子」は現在では和泉流のみが現行曲とするが、かつては大蔵流や鷺流でも演じられていた。二六番以外にも『閑吟集』所収の歌と近い歌が多数歌われているが、流派により台本により歌われる歌の種類には違いがあり、歌詞にも異同が少なくない。とりあえずここでは二六番の歌に絞って狂言諸台本から当該部分を抜き出して一覧表で示す（表1）。なお、内容を理解しやすくするため、私的に句読点を補った。使用した狂言台本と書誌情報については本論の末尾に記したので、そちらを参照されたい。

表1 『閑吟集』二六番と狂言諸本の歌謡

流派	台本	本文
	閑吟集	上林に鳥が棲むやらう。花が散り候。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥追はう。
	天正本	上の山には鳥か住やらふ。花かちり候。いざさらば。なるこをかけて。花の鳥おわふ。
大蔵	虎明本	うへのはやしに鳥がすむやらう。花かちり候。いざさらば。なるこをかけて。花の鳥おほふ。
和泉	天理本	上の山から鳥か来るやらう。花か散り候。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥追お。
和泉	和泉家古本	上の山から鳥かくるやらう。花かちり候。いざさらば。なる子を掛けて。花の鳥お。
和泉	明和中根本	うゑの山から鳥か来るやろ。花が散候。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥追ふ。
和泉	古典文庫本	上の山から鳥かくるやらう。花かちりさふらふか。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥をおはう。
和泉	三百番集本	うへの山から鳥が来るやらう。花が散り候。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥追ふ。
鷺	安永森本	上の山には鳥が住むやら。花が散り候。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥追はう。
鷺	安政賢通本	上の枝には鳥が住むやら。花が散り候。いざさらば。鳴子を掛けて。花の鳥を追はう。

62 現存最古の狂言本。奥書に「天正六年七月吉日」とあることからこの名があるが、明らかに本文と別筆であり、実際に天正六年（1578）に写されたわけではないらしい。

63 他の台本は「花子」と称する。

64 他の台本は「枕物狂」と称する。

65 北川忠彦校注『閑吟集 宗安小歌集』の文末（二八二～二八五頁）に掲載した「関係狂言歌謡一覧」を参考した。

まず『閑吟集』二六番と天正本の歌謡を比べると、異なっているのは冒頭の部分だけで、『閑吟集』が「上林に」となっているのに対し、天正本は「上の山には」となっている。馬場光子氏は、この二首について以下のように述べている<sup>66</sup>。

これは肩書きを「小」とする『閑吟集』二六番歌と（「上の山」は、『閑吟集』では「上の林」）同歌である。一首は以下に続く「引く」のキーワードを持たないので、はじめから〈引くもの〉尽しの歌謡としてあったものではなく、おそらく、狂言題目と同じ「鳴子」のこトバを持つことよっての転用であろう。それは、一首の主題が花の散る事実から上の山に住む鳥を想定し、花を散らす鳥を追うために鳴子をかけるといったような、平安朝以来の歌材としての風雅な鳴子を歌うところから、狂言「鳴子」を、王朝のみやびな格調高い芸風として性格付けるために、あえて冒頭歌として、後に据えたのだと思われる。

馬場氏は、天正本の方が後からこの「鳴子」というキーワードを持つ歌を追加したと考えている。狂言「鳴子」は秋の山田に実った穀物を食べる鳥を追い払えという主人の命令を受けて太郎冠者と次郎冠者が鳴子を引きに行く話であるから、そもそも春の歌である二六番の歌とは季節が合わないが、二六番には花を散らす鳥を追い払う道具として「鳴子」が登場するので、その縁から二六番が利用されたという馬場氏の主張は説得力がある。ただし、馬場氏は「上の山」と「上の林」（「上林」）という『閑吟集』との異同についての指摘はしているが、その異同が持つ意味については特に分析はなされていない。

ここで、『閑吟集』の二六番が狂言に取り入れられるにあたって、元の「上林」がなぜ天正本の「上の山」のような形に変化したのか、その理由を考察してみたい。そもそも風雅を取り入れるためとは言いながら、狂言のような庶民的な芸能の中に取り入れられるからには、二六番は当時それなりに人気を博して流布していたはずである。しかしながら、漢語の「上林」は一定の漢文化の素養をもっている人でなければ理解し難い言葉なので、そのままの形では二六番に相当する歌は流布しづらかったと思われる。その辺の事情は、『閑吟集』の有力な伝本である阿本・函本の段階で既に左訓として「うへのはやし」が付されていることから容易に想像が付こう。実際問題として、純粹な小歌として見れば「上林（しゃうりん）」のような漢語が小歌の中に一語だけ混じっているのは調和が取れていないと後人から受け取られてもおかしくない。結果としてその後「上林」はもっぱら「うへのはやし」と読まれるようになり、意味も「天子の御苑」ではなく「上の方向にある林」の意味に解釈されて一般に流布していった。狂言に取り入れられたのはそちらの方であったと推測される。その際に「上の林」が「上の山」に変化したのは、狂言「鳴子」の舞台が周囲を山で囲まれた田<sup>67</sup>であって、「上の林」よりも「上の山」の方が一層ふさわしいと判断されたからではなかろうか。

続いて表1で天正本以外の諸台本を見てみると、天正本と同じく「上の山」とするものが多

66 馬場光子著「〈鳴子〉歌伝承考」より引用した。太田善磨先生古希記念論集刊行会編『国語国文学論叢』群書（発行所）昭和六三年 四二三～四五〇頁。

67 「一人出て、辺りの者、山田の作に、村鳥が渡つて、田を食む、追わせうと云て、太郎冠者、二郎冠者を、呼び出す」（天理本「鳴子」）



いが、一部「上の林」や「上の枝」という表現も使用されている。さらに、天正本と『閑吟集』では異同のなかった「すむ」の部分が「くる」となっている台本も登場している。

まず注目したいのは、虎明本が「うへのはやし」を使用している点である。これは第二節で紹介した『閑吟集』の「上林」の左訓に相当する。近世に入って、流儀の成立と家元制<sup>68</sup>の導入に伴い、より優れた内容と差別化を求めて、各流派は台本の改作を加速してゆく。本節冒頭の部分で紹介したように、天正本の段階では『閑吟集』と類似する歌謡が歌われている狂言は四曲しか存在しないが、虎明本以降は曲数だけでなく、一曲あたりの『閑吟集』歌謡の利用数も増えている<sup>69</sup>。近世の諸台本で『閑吟集』と類似する歌が増えたのは、これらの諸台本が『閑吟集』乃至それに由来する中世歌謡を参看して狂言に取り入れるようになったからだろう。その中であって、虎明本が『閑吟集』二六番に由来する「上林」の訓読み版である「上の林」に回帰したが、虎明本以降、大蔵流は「鳴子」を廃曲としたため、「うへのはやし」は早々に狂言から姿を消してしまう。

一方、和泉流の台本は、すべて「上の山」で統一されている。天正本で採用されている「上の山」が狂言として受け継がれてきた伝統的な表現であったこと、「上の山」という表現が「鳴子」の舞台となっている山田と合致していること等がその理由だろう。『閑吟集』の「上（の）林」を採用しなかった理由は不明であるが、あるいは「うへのはやし」を採用した大蔵流に対抗したものかもしれない。

「すむ」と「くる」の選択にも流派の違いを見ることができる。虎明本は天正本と『閑吟集』以来の「すむ」を踏襲しているのに対し、和泉流の台本は何れも「すむ」を「くる」に変えている。大蔵流と違う表現を取りたいということもあったのかもしれないが、強いてその理由を考えるならば、二六番の歌謡を狂言に取り入れたこと自体に問題があったからということになるだろうか。もともと春の花を散らす鳥を追うという内容の歌謡であったものを、単に鳴子が出てくるからという理由で秋の稲を食う鳥を追う歌として狂言の「鳴子」に取り入れているため、最初から無理をしているところがあるのである。そんな中であって、和泉流の詞章はこの歌謡を少しでも狂言の実態に近づけようとした努力の表われと捉えることができよう。そもそも、この狂言において登場人物が鳴子を仕掛けて追い払う必要があるのは「上の山に棲むすべての鳥」ではなく「上の山から飛んできて稲を食らう鳥」なのである。加えて、鳴子を仕掛ける場所も「上の山」ではなく山田の方なので、理屈の上では和泉流の詞章の方が遥かに筋が通っているとと言えるのではなからうか。

鶯流は参照した台本が少ないため、あまり確定的なことは言えないが、安永森本を見る限りは、天正本の「上の山」「すむ」と一致しており、一応は古くから伝わってきた表現を守っていると言えそうである。なお、安政賢通本のみは「鳴子」ではなく、狂言「花盗人」の中で歌われている歌謡である。花の縁から「鳴子」の当該歌謡を「花盗人」に取り込んだものと見られるが、この台本のみ「上の山」が「上（かみ）の枝」となっているのは、花の枝を折って盗む「花盗人」の筋に合わせたことによるものだろう。

以上、『閑吟集』二六番を狂言の諸台本と比較してきたが、少なくともこの一首に限っては、

68 能楽や舞踊などの技と伝統を継承してきた家筋。江戸時代に入って盛んになる。

69 前掲65と同じ。

狂言の方が『閑吟集』二六番に由来する歌謡を利用したと考えてよさそうである。ただその利用の仕方や原典に対する態度は時期によって違いがあり、『閑吟集』の伝本の共通祖本が成立した大永八年（1528）から天正本の奥書に見える天正六年（1578）にかけて狂言に取り込まれた際には、若干歌詞の変更はあったものの、原形に近い形をとどめていたが、江戸期に入ると大蔵流のように『閑吟集』二六番に回帰して「うへのはやし」に変えた流派もあれば、逆に和泉流や鷺流のように伝承されてきた歌詞を筋立て（物語）に合わせて変更した流派もあるといった具合である。ただ狂言は、いずれの場合においても『閑吟集』本来の「上林（しやうりん）」という漢語の形ではなく、「上（うへ）の林（はやし）」のように訓読みした形で受容していた。これは狂言が二六番の歌を取り入れた段階で既にこの歌が「上の林」という歌詞で流布していたためであると考えられる。そういう意味では、「上林」という語は中世歌謡における「漢語から和語へ」という質的な変化の過程をたどる上で興味深い資料を提供してくれていると言えよう。

## 五

以上、四節にわたって考察してきたが、『閑吟集』二六番に見える「上林」という語が本来は「天子の御苑」という意味の漢語であったことを明らかにし得たと思う。知識階層に属して一定の漢文学の素養をもつ者でなければ、この言葉に接触する機会は少ないはずである。よって、『閑吟集』の二六番の歌は、当時の巷で流行していた既存の歌を取り入れたというよりも、たとえば『閑吟集』の編者のような漢文学に対して深い関心をもつ人によって作られたものではないかと思わざるを得ない。なぜなら、宮中の苑を舞台として、花が散るのを風ではなく鳥のせいにする趣向と言い、実用的な道具である鳴子を風流物たる護花鈴に見立てる工夫と言い、最初から最後まで貴族の気風が漂うこの歌は、庶民の実生活と直結する歌ではなく、大陸から舶来した文化を巧みに生かして小歌の形で表現した和漢折衷のものだからである。

とは言え、今回小論で取り上げることができたのは「上林」ただ一語に過ぎない。今後は『閑吟集』に使用された他の漢文学的表現にも注目し、狂言など他分野への影響も考慮しながら、中世歌謡と漢文学との複雑な関係を明らかにすることを課題にしたい。

## 参考文献

- 吾郷寅之進著『中世歌謡の研究』風間書房 昭和四六年  
 浅野健二著『閑吟集研究大成』明治書院 昭和四三年  
 浅野健二著『新訂閑吟集』岩波書店 平成元年  
 池田廣司著『狂言歌謡研究集成』風間書房 平成四年  
 白田甚五郎他校注『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（新編日本古典文学全集42）小学館 平成一三年  
 太田善磨先生古希記念論集刊行会編『国語国文学論叢』群書（発行所）昭和六三年  
 北川忠彦著『狂言歌謡考』和泉書院 平成八年  
 北川忠彦校注『閑吟集 宗安小歌集』新潮社 昭和五七年  
 小島憲之校注『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店 昭和三九年

- 小林芳則他校注『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（新日本古典文学大系56）岩波書店 平成五年
- 志田義秀著「室町時代の小歌と閑吟集」『国語と国文学』 大正一三年六月号
- 高田真治著『詩経 上』集英社 昭和四五年
- 高野辰之編『日本歌謡集成』東京堂出版 昭和三五年
- 土井忠生他編『邦訳 日葡辞書』岩波書店 昭和五五年
- 中哲裕著『閑吟集定本の基礎的研究』（新典社研究叢書112）新典社 平成九年
- 橋本朝生著『狂言の形成と展開』みづき書房 平成八年
- 秦恒平著『閑吟集 孤心と恋愛の歌謡』日本放送出版協会 昭和五七年
- 馬場あき子著『馬場あき子全集 第七巻 古典文学論』三一書房 平成九年
- 馬場光子著『走る女 歌謡の中世から』筑摩書房 平成四年
- 藤田徳太郎著『歌謡文学』河出書房 昭和一三年
- 藤田徳太郎著『古代歌謡乃研究』有精堂出版 昭和四四年
- 真鍋昌弘著『中世近世歌謡の研究』桜楓社 昭和五七年
- 真鍋昌弘著『中世の歌謡—『閑吟集』の世界』翰林書房 平成一一年
- 真鍋昌弘著『中世歌謡評釈 閑吟集開花』和泉書院 平成二五年
- 諸橋轅次著『大漢和辞典』大修館書店 昭和三〇年～昭和三四年
- 兪鹿年編『中國官制大辞典』黒龍江人民出版社 平成四年
- 『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂 昭和六〇年～平成一三年
- 『日本国語大辞典 第二版』小学館 平成一二年～平成一四年

各資料の本文は以下の文献に依った。

- 閑吟集……『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』（新日本古典文学大系56）小林芳則他 校注  
岩波書店 平成五年（翻刻本文）  
『閑吟集定本の基礎的研究』（新典社研究叢書112）中哲裕著 新典社 平成九年（校異部分）
- 和歌……『新編国歌大観 CD-ROM 版』新編国歌大観編集委員会 角川書店 平成一五年
- 五山詩文……『五山文学全集』上村観光編 思文閣 昭和四八年  
『続群書類従 第12輯ノ上 文筆部』塙保己一編 続群書類従完成会 明治三八年  
『続群書類従 第13輯ノ上 文筆部』塙保己一編 続群書類従完成会 明治四〇年
- 抄物……『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』大塚光信他校注 岩波書店 平成七年
- 天正狂言本……『天正狂言本 本文・総索引・研究』内山弘編 笠間書院 平成一〇年
- 虎明本……『大蔵虎明本狂言集の研究 中』池田廣司・北原保雄編 表現社 昭和四八年
- 天理本……『狂言六義全注』北原保雄・小林賢次編 勉誠社 平成三年
- 和泉家古本……『日本庶民文化史料集成 第四巻 狂言』三一書房 昭和五〇年
- 明和中根本……法政大学鴻山文庫蔵和泉流明和中根本 野上記念法政大学能楽研究所

能楽資料デジタルアーカイブ

[https://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken\\_material/htmls/index/pages/cate6.html](https://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken_material/htmls/index/pages/cate6.html)

古典文庫本……『和泉流狂言集 十六』吉田幸一編 古典文庫 昭和三五年  
三百番集本……『狂言集成』野々村戒三・安藤常次郎編 能楽書林 昭和四九年  
安永 森本……『狂言篇 上』斎藤香村校訂 謡曲文庫刊行会 昭和三年  
安政賢通本……『狂言集 下』古川久校注 朝日新聞社 昭和三一年

デジタル資料…

『平家正節』（新日本古典籍総合データベース）

<http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200002025/viewer/185>（右側 右から1行目）

『三輔黄図』（早稲田大学 古典籍総合データベース）

[http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru05/ru05\\_03041/ru05\\_03041\\_0002/ru05\\_03041\\_0002.html](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru05/ru05_03041/ru05_03041_0002/ru05_03041_0002.html) (3, 4)

『西京雜記』（早稲田大学 古典籍総合データベース）

[http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31\\_e1954/bunko31\\_e1954\\_0001/bunko31\\_e1954\\_0001.html](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31_e1954/bunko31_e1954_0001/bunko31_e1954_0001.html) (10)

『一遍聖繪』（国立国会図書館デジタルコレクション）

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2591573?tocOpened=1>（[1] コマ番号34/38）

『雑字類書』（国立国会図書館デジタルコレクション）

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286982>

（コマ番号170/589「内裡」, 223/589「梨」, 225/589「鳴子」, 542/589「主水司」, 571/589「李」）

『唐官鈔』（早稲田大学 古典籍総合データベース）

[http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/wa04/wa04\\_01603/wa04\\_01603\\_0002/wa04\\_01603\\_0002.html](http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/wa04/wa04_01603/wa04_01603_0002/wa04_01603_0002.html) (18)

『天隱和尚四六図』（国立国会図書館デジタルコレクション）

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11038508>（コマ番号7/45, 8/45）

『詩学大成抄』（市立米沢図書館デジタルライブラリー）

[http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA146\\_view.html](http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/AA146_view.html)（1冊目/10冊の38）

『史記抄 19巻』（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008022#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-2317%2C-114%2C7704%2C2275>

（コマ番号278/1326「秦始皇本紀第六」, 999/1326「司馬相如第五十七」）

『四河入海 25巻』(国立国会図書館デジタルコレクション)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2584938> (四河入海六之三 三十九, コマ番号42/51)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2584971> (四河入海十四之四 十九, コマ番号21/59)

『翰林五鳳集』(国立国会図書館デジタルコレクション)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2568314?tocOpened=1> (コマ番号78/94)

『梅花無尽蔵』(国立国会図書館デジタルコレクション)

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2550868?tocOpened=1> (コマ番号46/151)

『開元天宝遺事』(京都大学貴重資料デジタルアーカイブ)

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008023#?c=0&m=0&s=0&cv=9&r=0&xywh=-1931%2C0%2C6933%2C2047> (コマ番号10/34)